

## 二 環境管理主体としての村落組織とその変容

—琵琶湖岸の村の百年の歴史から—

琵琶湖研究所 嘉田 由紀子

### 一 村落社会研究の“読み直し”と環境問題

これまで村落社会研究会のテーマとしていわれる「環境問題」が正面からとりあげられる場面は少なかった。世間でいう「環境問題」は、水質、大気、土壌などの汚染や資源の枯渇などがすでに「問題である」と社会的に認識されていることを前提にしている。つまり、社会生活の現場での環境問題のあり方をみてみると、自然科学的データにもとづいて、たとえば水質の濃度がある一定の高さにあることを問題とみるかみないかは人間の側の認識にかかわることであり、そこではある状況を「問題視する」という社会・文化的フィルターがかかってはじめて個別の問題が一般的な「問題」に転化するのである。

これまで村落社会研究が関心をむけてきたテーマの多くは、環境問題が問題視される以前のいわば「潜在的な環境問題」に強くかわってきたことになるのではないだろうか。川本彰氏の指摘する村落のもつ領域保全機能や、中田実氏らの漁場管理の伝統などは、環境問題を「問題化」させないために村落社会が先手をうってきた機能ということさえできる。あるいは現場の感覚からいえば、自分たちの「生活保全のための資源保全」が結果として環境保全の役割を果たし、環境問題を問題化させない“シャドウファンクション”（隠れた機能）を果してきたともいえる。

そこで、本報告では、まず、社会的に地域環境問題や地球環境問

題に関心が高まっている現在、村落社会研究での蓄積を環境問題という視点から“読み直す”という作業が必要ではないだろうかという提案をまずさせていただく。

そして次に、琵琶湖岸のある村落の、明治維新以降、現在までの環境管理の歴史を辿りながら、村落のもつ水環境保全の役割とその変容について考えてみたい。かつての村落はどのような資源保全の機能を果してきたのか、それは歴史的にどう変化してきたのか、その外的・内的要因を探りながら、現在の村落が果たして環境保全の主体としての役割をになっているのかどうかについて検討し、今回の大会の課題である農村再編成の問題にアプローチしてみたい。

### 二 水環境管理をめぐる村の百年

ここで紹介する滋賀県マキノ町知内は、琵琶湖に面した村で、集落の中には知内川、人通川、百瀬川、本ノ川という1級河川が4本、小さな用排水路まで含めたら無数といえる小川があり、川の多い村である。琵琶湖や河川では現在でも活発に漁業活動が行われていて、伝統的には半農半漁の村ということになる。

知内村には、江戸中期、延享年間から現在まで、約二五〇年以上にわたる『村記録』がその時々（村、区、大字）の代表者の手によって記録されている（現在、古川彰と伊藤康宏によってこの記録のデジタル化が進行中）。また藩政時代から現在までの村方文書も村の帳蔵に数多く保存されている。

その中から明治維新以降の河川や湖と村落とのかかわりに関する記録を時代別に整理してみると次のような出来事がうかがいあがってくる。

明治維新直後…知内川、ヤナの漁業権争い（隣村西浜村と、勝利）  
明治一〇年代…河川と琵琶湖の漁業資源枯渇への村落的対応

（村立養魚場の開設と運営―明治三〇年代まで）

明治十八年…琵琶湖・知内川大水害（知内川ヤナ漁業権の貧民  
への開放）

明治三二年…（市制・町村制施行にともなう）知内村規約制定

明治三九年…琵琶湖・知内川大水害

明治三〇年代…知内川・百瀬川堤防復旧工事、漁業組合の発足

大正初期…知内川堤防復旧工事

昭和初期…汽船寄港誘致運動

昭和一〇年代…百瀬川の水害防止用新河川開削

昭和二〇年代…（漁業改革）、知内川堤防復旧工事

昭和三〇年代初頭…簡易水道敷設（飲料用小川の汚染）

昭和三〇年代後半…湖岸キャンプ場開設

昭和四〇年代…知内川改修工事（湖西線開通）

昭和五〇年代…ほ場整備・灌漑排水事業

（現在）…百瀬川改修工事計画、農村下水道計画、湖岸リゾ  
ット計画化

本報告では、特に河川や湖の水害と、それへの村落の対応に焦点をあてて、村の文書記録などに残されている金銭的・労働的な水害対応の実態を把握しながら、村人の記憶から辿ることができる水害対応の内面的論理にもアプローチしてみたい。